

バスケを愛し、愛された男

ソーパトリック

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

劇場版 黒子のバスケ LAST GAMEのジェイソン・シリバーと同じ身体能力を持つバスケが大好きな主人公はキセキの世代と戦い、キセキの世代達を変える・・・かもしね

第一
話

目
次

12 1

第一話

部員数は100人を超える全中3連覇を誇る超強豪

帝光中学バスケットボール部

その輝かしい歴史の中でも特に「最強」と呼ばれ無敗を誇った。

帝光中学の中に『10年に1人の天才』が5人同時に奇跡的に集まつた選ばれた5人の天才プレイヤー達。

黄瀬涼太、緑間真太郎、青峰大輝、紫原淳、赤司征十郎。

天才たちは『キセキの世代』と言われた

一一だがもしキセキの世代凌駕する才能の選手がいたら。のちにバスケットボール界では名前を知らない人などいない選手

荒木 太陽の物語

東京の冬

一軒家の前に長袖長ズボンバスケットボールをもつたオレンジ色の髪の小学生の少年がインターフォンを鳴らし家中に入った。少年こそ本作の主人公荒木太陽

家の中に入ると30代くらいの男性はコーヒーを飲みながら新聞読み男性と同じくらいの女性が料理をしていた

「おはよう！おじさん、おばさん！大ちゃん起きてる？」

「太陽おはよう今日も早いね、大輝は2階でまだ寝てるよ」

「わかつた！起こしてくる」

太陽は2階に行きダイキとカタカナで書かれたネームプレートがかけられたドアにノックもせず無断に部屋の中に入り布団の膨らみに飛びついた

「おはよ大ちゃん！朝だぜ、バスケしようぜ」

「うげえええ、おい太陽毎回毎回起こしに来るたび俺の上にまたがるのやめろ！しかも今何時だと思つてる」

「もう5時だよ！早くしないと学校がはじまっちゃう」

今太陽の下にいるこんがりと日焼けをした色黒の青い髪の少年青

峰大輝小学5年生であり、太陽の幼馴染のちに帝光中に入りキセキの世代の大エースとなる選手

「まだ5時だ。それとさつきは？」

大輝は言葉では嫌がっているが顔には嬉しそうにしながらバスケの格好をしながら聞いてきた。

桃井さつきとはピンク色の髪をした美少女、太陽と大輝の幼馴染であり、のちに帝光中に入り、バスケットボール部のマネージャーになる「キセキの世代」をサポートするスーパーマネージャー

実はこの3人は家が隣同士であり、親たちも幼馴染ということもあり赤ちゃんの頃から仲が良く、太陽の母はバリバリの働くキャリーウーマンで太陽の父は太陽が幼い頃に病氣でなくなり太陽は父の顔を知らない。母子家庭だが2人の親がよく面倒を見てくれたため太陽はさみしい思いをしていない。

さつきは物心つく前から太陽の事が好きなのだが太陽は全く気づいておらず、小学生高学年になると太陽と大輝はモテはじめ太陽は天真爛漫な性格すぐ友達が増えていき、特に年下の女性が多く増えていき、さつきはかなり焦つており最近では幼馴染の特権を利用して太陽の家と一緒に寝泊まりして、ボディータッチのアプローチをしている。大輝はサツキの気持ち気づいて応援してるのだが太陽の方は全く気づかない（鈍感）。今日も太陽の家にサツキは泊まり、2人は目覚ましと一緒に起き太陽は支度を終えサツキを待つていたら『陽ちゃん私は朝の支度にもう少し掛かるから先に大ちゃん起こしてきて』サツキは太陽の事を「陽ちゃん」と呼び太陽は「モモちゃん」と呼んでいる。大輝の事を2人は「大ちゃん」と呼び大輝は2人のことを下の名前で呼び捨てている。

3人の家から20分近くに歩いた所にバスケットコートがあり、朝は3人でバスケットコートで太陽と大輝はいつも1対1をしており、サツキもたまに2対1で入る事もある。その後家に帰り学校へ行き放課後大人達と混ざって太陽と大輝はバスケをしており、サツキはいつも見ている。

それがいつものルートイーンだつた

いつも太陽はなぜ幼馴染2人を起こして、朝バスケを3人ですか
と言うとちゃんと理由はある。

太陽達が小学四年生の頃、休日の朝4時太陽は朝早く起き外を見ると外が明るく太陽はバスケができると思い幼馴染と一緒にバスケしようと思つたがさすがにこんな早くから起こすは申し訳ないと想い、太陽は「先にバスケットでバスケして」と紙に書き2人の家のリストに入れバスケットコートに向かつたのだが着いたのは隣町のバスケットであり太陽はそのまま気づかずバスケをしていたがいつまで経つても大輝達が来ないので不思議に思い、太陽は大輝達の心配をして家に帰つたが家の近くに着くまで何時間も掛かつた。やつとの想いで家に着いたが家の前には大輝の親たちとサツキの親と俺の母親と警察がなにか話していた

「・・・すみません。もしかした・・・君は誘拐されたかもしません
まだわかりませんが警察は全力をもつて捜索します」

「そんな。」

サツキと大輝達は警察の話に夢中になり太陽に全く気づかなかつたので太陽は大輝とサツキが誘つたことに来なかつたので仕返しに驚かせようと後ろから抱きついた。

「お前らなんで来なかつただよ！俺ずっと待つてたのに」

すると大輝半泣きしサツキ大泣きして いたそれを見た太陽は驚き。太陽が驚かせ泣かしたのかと思つたが。2人が聞いてきたのは今までどこで何をしていたのかを聞いてきたので太陽は不思議になりながらもいつもの所でバスケをしていたと答えた時、3人の話は全然話があつていなかつた。2人（さつきと大輝）はいつもの所に太陽はいなかつたらしい心配になつた2人は家に帰り親に相談し太陽を探したが見つからず。警察からもしかしたら誘拐されているかも知れないと不安になつたが、そこで太陽が帰つてきたらしい。

「太陽いつものバスケットが案内して」

「おう！いいぜ！……あれ？……こっちだ……いや絶対にこっちだ…あれ？行き止まり？」

「なんで道に迷うんだよ！俺たちの家から真っ直ぐだろ!!」

太陽は家からほぼ直線的に進めばあるバスケットコートを進んでから5分で迷い太陽以外は太陽が方向音痴だとわかった

大輝が太陽に注意するとサツキの親と大輝の親太陽の母が一斉に頭を手で押さえため息がでていた。

昔太陽の父も方向音痴だつたのだが、親たちも太陽の父の方向音痴にはいつも苦労したらしい。なぜ今まで太陽が方向音痴だと気づかなかつたのかはいつもサツキ達に引っ張られて行動していたため、気がつかなかつたらしい。

母からみんなに迷惑かけたので太陽には3つのルールが与えられた

- 1、朝バスケをする時は5時から。
- 2、どこかに行く時は誰かと一緒に
- 3、もし1人になつた時は必ず1人で解決しないで、近くにいる人に道を聞くこと

「大丈夫！もう迷わないから「ダメ。陽ちゃんみんなに心配かけたんだから言うこと聞いて」……モモちゃん？」

太陽はサツキに泣きながら抱きつかれ、ルールを認めるまで泣き止まず離してくれなかつたので太陽は母のルールを守ることにした

太陽達は朝バスケを終え、3人は小学校まで歩いていた

あの事件から大輝とサツキは太陽に過保護になり、毎日太陽を挟む形で登校しており学校でも3人はずっと一緒にいた。しかも奇跡的に幼稚園の頃から3人はずっと同じクラスでいる。

太陽は毎日のようにバスケットボールを肌に離さず持つており、ハンドリングでは誰にも負けない自信があり太陽にはバスケットボールが体の一部になつていた。

ある日太陽と同じクラスの奴が

「なあー太陽なんでいつもバスケットボールもつてるの？」

その言葉にみんなも気になり耳を傾けていたが太陽は当たり前のよう

「ああ！友達はボールだからな！」と答えたのだ。

太陽の言葉を聞いたクラスメートは

「俺ら友達じゃないのか」「ひどい。友達だと思つていたのに」

クラスの全員（大輝、サツキ）が泣き出し太陽は困惑して、幼馴染

になぜ泣き出したのか聞いてみた

「なんでみんな泣いてるんだ？モモちゃん大ちゃん」

「もお陽ちゃん！逆だよ逆、ボールは友達でしょ？さつき陽ちゃんは言つたことだと友達はボールしかいないことになつちやうよ」

「ああそつか。てか大ちゃんわらいすぎわかつてたなら止めてよ！」

「わりいわりい」

その後泣いているクラスメートを慰めるのに1限目の授業が潰れ

た

金曜日の朝学校で幼馴染3人はホームルーム前先生が来る前に今日の朝バスケについて話をしていた時明らかにテンションが低い美人の先生が入ってきた

太陽達5年2組の岡井先生、太陽はなぜかオカチャンと呼び始めた
らクラスメイトも一緒にオカチャンと呼んでおり生徒達から慕われており授業もわかりやすく完璧な先生だが・・なぜか男運が悪くいつも二股男や、三股男、二ートなどとにかく男運がかなり悪く、振られた日にはオカチャンはテンションが低くクラス全員が慰めないと授業が全くできないのだ

今日も振られたかと思ったが

「席につけ。はあー。。まず太陽前にここに来なさい」

「え？・・・はい」

クラスメイト達は太陽がなんやらかし先生に呼ばれたと思つていた。

幼馴染2人も太陽いつも一緒にいたので太陽がなにかしたら気づいてるので太陽だけ呼ばれたかわからないし太陽も頭に？をうかべて先生の隣にいき黒板の前に立たされたオカチャンは太陽の肩に

手を置いき説明した

「みんな聞け、太陽はわかつてるとと思うが今日でこの学校を去る事になつた。急だと思うが『ええええー』：なんで太陽も驚いてるんだ？」
「オカチヤン俺聞いてねえよーー！ オカチヤンだれから聞いたんだよ」

「太陽の母から。朝に学校に電話があつて『今週の日曜日仕事で引っこ越すことになり、太陽も連れていくことにしました』って言われてそのまま電話切られた」

「先生、俺今から母ちゃん所行つてくる」

『待つて！』

太陽は先生の話を聞いた瞬間ランドセルを持ち家に帰ろうとしたところ

幼馴染2人に腕をつかまれた

「なにするだよ2人とも『陽ちゃん忘れたのルール！ 1人で家に帰れないでしょ？だから私たちもいくよ（陽ちゃんと離れたくない。なんとしても止めないと。）』あ、忘れてた2人ともありがと。じゃあ先生、みんなまたなー」

『（・・・1人で家に帰れないのかよ）』

3人は走つて家に向かつていると太陽の家の前に引っ越しのトラックが来ており、引っ越し業者の人と太陽の母が話をしていた
「大ちゃん、ボール持つてて」

「あ、おい太陽・・・速つ」

太陽は大輝にボールを押し付け、太陽は全速力で自分の母を飛び蹴りした

「そーい」

「うげえ・・・なにすんのよ太陽てか最後の学校は？」

「そつちこそなんだよ最後の学校つて。」

「あれ？ いつてなかつたけ、私の仕事で転勤することになつたのよ」

「いつてないよ！ 俺はいかないからな」

「じゃあ今いつたわ。えーお願ひ太陽もついてきて」

「だめ！ おばさんだけいけばいいじやない」

太陽の母と後から来たサツキが太陽を取り合っていた、

すると太陽の母が太陽の耳元で「ねえ太陽私が行くところはねバスケの本場よ」とサツキには聞こえないよう話した、するとバスケバカな太陽は

「し、しようがねえな、母ちゃんは俺がないと、料理、掃除、洗濯も全く出来ないから俺が着いていつてやるよ」

地味に太陽は自分の母を傷つけながら、太陽はもうすでに頭の中にアメリカの事が一杯であり、サツキは太陽が急にニヤニヤしながら太陽の母についていくと聞き、どうして太陽はついていくのか聞こうとしたら太陽は「バスケの本場・・・アメリカ・・・U S A ・・ N B A」と自然と口に出しており、サツキは「はあ、しようがないよね。大ちゃん以上にバスケバカなんだから」と太陽のニヤケ顔に見惚れていった「恋は盲目」というやつだ

大輝はといふと太陽は一度決めた事は聞かないでの、引越しを止めることは無理だと思い、太陽が引っ越す前に思い出を作ろうと「太陽！最後旅立つ前にバスケしに行こうぜ！」と太陽を誘い、いつものバスケットコートでバスケすることになった

バスケットコートにつき、早速2人は1対1することにルールは先に5点取つた方が勝ちで攻守は1回ごとに交代もし5ー5になつたら先に2点差つけた方が勝ち

先攻は大輝。スリー・ポイントラインからドリブルをつき左右にレッグルーからのクロスオーバーで右に行き抜かせたと思つたが太陽は正面に来ており、大輝は左にフェイクをし右で太陽を抜かしレイアップを決めた

次は太陽が大輝がやつたように左右にレッグルーで揺さぶりをかけた

「(左・・・右・・・来る)」

大輝は右で来ると思つていたが太陽は右足でステップを踏みバツクステップで後ろに下がつた

「な、なに!」

太陽はフリースローラインからジャンプショートが決めた

結果は6ー8で太陽が勝つた

1対1の試合が終わり太陽はサツキの所へ向かつた

「どうだつた試合」

「うん！すごかつた2人ともどんどんうまくなつていくね」

「じゃあさ、次はモモちゃんも一緒にやろうよ」

「えー。無理だよ私2人みたいに上手くないもん」

「バスケに下手だからやんないつていうのはだめ！バスケは上手い下手関係ない！」

「うんそりだねよね！じゃあ私もやる」

チームは太陽とサツキVS大輝

「モモちゃんは好きな所動いてて俺がバスするから見ててね」

「うん！信じてるね」

太陽はドリブルをつきながら大輝に仕掛け、右に抜いたが抜いた先にはサツキがいた

「（ううう）間近で見るとカッコいいよ。はつ！こつちに来てえ！ぶつかる」

「（よし右に行かせたが・・さつきがいるから左にいくはずだ）」

大輝の言う通り、太陽はサツキ少し前まで行き、ロールターンをしていなかつた

方向転換をした

左へ進みレイアップのステップを踏み込んだ。大輝もジャンプをし、太陽のレイアップをはたき落とそうとしたが太陽はボールを持つていなかつた

「（よつし狙い通りだ！）甘いぜ太陽！・・・・なに!?」

「モモちゃん。シユートだ！」

「あ、うん！」

サツキはそのままシユート決めた

「モモちゃんイエーイ！」

「いえーい」

2人は笑顔でハイタッチをしたすると大輝がいつバスをしたのか質問してきた

太陽は抜かした先にサツキがいることがわかつたので、わざとさつきの少し前に行きロールターンする途中でサツキに手渡し。バスをし大輝に見られないよう左でドリブルをついてるように見せかけたのだ

大輝V S 太陽とサツキは6ー5で大輝がリードをし、太陽とサツキはバス中心で攻め最後は太陽のスリー。ポイントを打ったがはずし、大輝は自分の得意なプレーで確実に決め

7ー5で太陽たちはに勝つたのだったが負けたが太陽は嬉しそうな顔し、大輝とサツキは最後の太陽のプレーに納得がいかない顔をしていた

「おい！太陽最後のオフェンスなぜ氣を抜いた!!?」

「抜いてないよ!!?」

大輝は太陽の最後のシュートは得意のミドルのジャンプシュートかと思っていたが、太陽はまさかの苦手のスリー。ポイントを打ち負けたので大輝は大好きなバスケで手を抜かれた事に怒っていた

「大ちゃん！『強いつて自由』なんだよ！俺はまだまだ不自由だけどうつか俺がバスケで自由な所見せるね！」

大輝とサツキは太陽の言っている事がさつきのプレーにどう関係しているかわからなかつた。大輝はストリートバスケなどで型にはまらない変幻自在のプレーをしており、太陽もハンドリングがよく相手を翻弄しており、オフェンスでは自由なのになぜ太陽は不自由なのかがわからなかつたが・・・ 太陽の威圧的な笑みを感じ、大輝はなぜかニヤつきが止まらなかつた

日曜日。羽田空港に来ておりそこには幼馴染やクラスメートまで全員が太陽に別れの挨拶をし、アメリカへ旅立つた。。

4年後・・・

ここアメリカでは今圧倒的人気がではじめているストリートバスケットボールチーム「Jabberwock」のチーム2人が今1

対1をしていた。1人は ジエイソン・シルバーもう1人は荒木太陽が対決をしていた。

『いえーい！どうだシルバー。今日も俺の勝ちだぜ!!』

『くそ！今日も負けた！もう一回だ太陽！』

すると【J a b b e r w o c k】のリーダー
ナツシユ・ゴールド・J rが

『・・・やめろシルバー次はオレだ！まずシルバーは太陽に勝ちたければトレーニングするんだな』

シルバーと太陽の1対1【J a b b e r w o c k】のチームメイトは『太陽が来てからみんな変わったよな・・・特にシルバーとナツシユはよく笑うようになったな。』

『だな！俺たちもバスケがこんなに楽しいものだと思わなかつたし、なぜか太陽のプレーを見るとバスケしたいってなるよな』

練習が終わり太陽、ナツシユ、シルバーと一緒に帰つてた
ナツシユが太陽に話しかけた

『太陽【J a b b e r w o c k】を抜けて日本に帰るつて本当か？』
『ああ！春になつたら向こうの高校にいくつもりだ』
すると聞いていたシルバーが

『なに！聞いてないぞ太陽！』

『ああ今言つたからな』

『俺たちのチーム飽きたのか!?』

『ちがうちがう、ただ母がアメリカの仕事が終わつて日本に帰るだけ
別に【J a b b e r w o c k】が嫌わけじやないから』
『けどよ・・・』

シルバーはまだ納得してないみたいなので太陽は
『じゃあさ、ナツシユ、シルバー、N B Aまでどのくらい成長するか勝
負しようよ！だから再会するとしたらN B Aだ』

「母ちゃん、俺どこの高校いくの?」

「ああ。香川県の中宮南高校よ」

「え? 香川? 大ちゃん達と一緒に東京じゃないの!?」

「そ! 私の父、いや太陽のおじいちゃんがそこで監督をしているから入れつてもらつたのよ、大輝とサツキには太陽が日本に来ること知らないから全国大会で2人を驚かせてやりなさい」

「そうだな! じいちゃんに会うのも久しぶりだし」

第二話

太陽と太陽の母は今、2階建ての一軒家の前に来ており庭にはバスケットゴールがあり。家の前には引っ越しのトラックが来ており、太陽達の荷物を家の中に運んでいた。

太陽はインターフォンを鳴らすと白髪の生えた40代くらいの厳しいダンディーのおじさんがでてきた。

「なんだ！今は忙しいんだ。新聞の勧誘なら後にしてくれ！」

「久しぶりお父さん」

「じいちゃん、久しぶり！バスケしていい？」

「おお太陽かなり大きくなつたの・・・その前に荷物を手伝つて来れ特になんだこのでつかいランニングマシーンは」

「ああそれは俺の」

東京にいた時は太陽と大輝は毎日のようにランニングをしていたがアメリカに着いた時は太陽の母はランニングに行くときには「友達と一緒に行きなさい」とルールを付け、太陽は渋々従いランニングをしていたが・・・アメリカの友達もバスケをしており一緒にランニングを付き合つてくれたが大輝や太陽クラスの体力はなく、1週間で拒否をされてしまった。太陽はその事を母に相談したらランニングマシンを買つてくれたのだ。

と太陽の母が説明すると。。。太陽の祖父は

「はあー。まさか太陽の父親の方向音痴が遺伝してたとは、知らなかつた。。。。」

太陽の祖父【荒木清】は顔は怖いが孫の太陽を溺愛しており学校では太陽の事を自慢しており特に監督をしてるバスケ部の部員達は太陽のことを耳にタコができるくらい知つており、太陽は中宮南高校に入る前から有名になつていてる。

祖父はそのくらい太陽のことを溺愛しており太陽の話に方向音痴を知らない事を悔しがっていたが今は4年ぶりに大きくなつた太陽がいるのでこれからしればいいと恋する乙女のような思考になつていた。

太陽と太陽の母は祖父の姿を見ていつも通りだと思い、無視して自分達の荷物を整理していたのだつた

太陽は高校入試を終え無事に中宮南高校入学すること決定した
今日は中宮南高校入学式。

新入生は8時半には教室に着き、9時に入学式が始まるので太陽は8時頃特注の紺色ブレーザーを着てバックを背負い1人で家を出でいた。

自宅からは一般人は地図を見れば徒歩で早くて10分程度遅ければ15分程度着くはずなのだが・・・・かなり方向音痴の太陽なので開始3分で学校とは違う方向へ進んだつた。

現在、中宮南高校の職員室

太陽の祖父は鼻歌を歌いながら楽しそうに今日入学式で使うビデオカメラを磨いていた。

すると祖父の清より少し老けたやさしそうな男性が話しかけてきた。

「うれしそうですね、清先生」

「あ、校長。いや～わかります？」

「はい、確か今日が例のお孫さんが来るですよね？」

すでに太陽の事は学校にいる人はほぼ知つており、職員室の先生方も太陽の祖父と校長の話を聞耳立てていた。

2人は話を盛り上がつていたがそろそろ式に出るため準備をしきり上げようとすると職員室に今は来る必要のない太陽の担任が入つてき、太陽の祖父の所に来た

「清先生～！まだ例の太陽君が来てないですけどどういことですか？」

？」

「なんじやと!!?」

「「「ええええーー」」」

とすぐさま清は太陽に電話をかけた、すぐに太陽は電話に出て太陽にどこにいるかと聞くと学校とは真逆の方にいつたらしく、道に迷つたらしい。

職員室の先生達は太陽の担任話を聞くと一瞬不良かと思ったが、清先生が電話で話してゐるのを聞く感じ例の孫の太陽はかなりの方向音痴らしく1人では行動は家では禁止しているのだが今日は家族全體が太陽の入学式で浮かれて気がつかなかつたらしい。その話を聞いた職員達は太陽という人物がわからくなつた。

学校につかないまま道に迷つていると同じ制服をした男子4人と女子1人が歩いていたので太陽はこのまま付いていけば学校に着くと思い歩いていたのだが5人が向かつたのは公園にあるバスケットコートだつた。

太陽は学校の入学式など忘れすぐ思考がバスケに変わつた

僕の名前は【伊東 俊】

中宮南高校を入学を希望し、バスケ部に入ろうと思つてゐる。中宮南高校のバスケ部は全国にいける強豪校でありバスケ部員は6人しかいない

なぜ、強豪校なのにバスケ部員が少ないかと言うと中宮南高校のバスケ部は最初は200～300人程度入るのだが監督の【荒木 清】は練習は人一倍きつく試合中ではあまり笑つたことがなく、別名「白髪の鬼」と呼ばれ次々に部活を辞めていくが残つていく選手全員が全国の試合にでれるほどの実力を持つてゐるのだ。【荒木 清】の指示は的確で昔元プロ選手のコーチもして いたそうだ

僕は幼馴染の【宇井 綾】と一緒に受け中宮南高校に無事に合格し2人で今日は入学式朝早めにでて綾と一緒に学校に向かつた

学校に着き、クラス表を見ると2人とも同じクラスの1年A組で喜んだ

教室に入ると席が黒板に書いてあり見ると名前の順番になつており、僕と綾は前後で、僕が最初の番号かと思ったが僕の前にも1人いた

入学式始まる前に担任の先生が入ってきて、出席を取つたのだが僕の前の人【荒木 太陽】がいつになつても来なく、クラスの全員は入学早々休むなんてうちのクラスには不良がいると考えていた思う。

入学式を終え、僕はある3人の元を訪ねた

それは元同中でチームメイトだった【金子 健太】【山口 悟志】【田中 将】まさか3人とも同じ高校だと思わず、3人に話しかけた。「みんな、バスケ部入るんだよね？」

「やんねえよ！俊もわかつてるだろ？オレも山崎も将も、もうバスケはやめたんだよ。。」

「うそだ!!?」

「嘘じやねえよ！」

「じゃあなんでバスケが強い中宮南高校に入つたんだよ!!?」

「!!」

「もう楽しくない。」

「・・・将」

3人はあの試合を思い出したのか暗い顔をした。

あの試合とは・・・僕達5人は同じバスケ部であり全国を出ていた、僕はシユーターで健太はガード山崎はセンター田中はフオワードで幼馴染の綾はマネジヤーをやりチームの目標として【全国制覇】を目指していた

中学2年生の時は全国ベスト16で、3年生が引退し金子がキヤブテンになり、僕は副キヤブテンになつた。スタメンでは僕たち3年生4人がでて2年生1人がいつも試合にでているメンバーだった。

最後の総体僕たちは全国の切符を手に入れ、ベスト8まで進んだが次の相手は帝光中学同じ年に5人の天才が集まつた【キセキの世代】がいる優勝候補のチームだ

キヤブテンの金子は諦めムードのチームを励ました「相手はワンマンだ、うちのチームプレイで勝てる」とみんなに勇気をくれみんなも

それこたえようと思戦つたが結果は

211-70でワンマンプレイで圧勝。しかも帝光中のスタメンは誰が1番点を取るかで勝負をして僕たちの事なんか気にしてなかつた。

3年生僕を含め4人はバスケに絶望し特にキヤプテンの健太は1番シヨツクを受け、あれ以来バスケをして笑わなくなつた。

けど俊だけは幼馴染の綾に励まされ、またバスケをすることでだんだん笑顔を取り戻した。俊はもう一度みんなとバスケが笑つてしたいとずつと思って説得していたが、叶わず中学最後3人はどこにいくのか知らなかつたがバスケの強豪校の中宮南に来てるつて事はまだ3人ともバスケは諦めてないとわかつた。だから僕はもう一度バスケの楽しさをわかつてもらいたかつた。だから僕は無茶振りをした「じゃあここでもう一度証明してやる!!? 僕1人対3人で勝つたらバスケ部に入つてもらうから」

「「は?」」

3人は何言つてんだこいつと顔して特に挑発に乗りやすい金子は「いいぜ! やつてやるよ」

と言い、4人は校門を出てる時に綾も会い合流して公園のあるバスケットコートに向かつた

僕達は準備運動をし、僕が持つてきたバスケットボールで3対1でやろうと思つた時

「ちよつと待つたゞゞ!!?」

「え?」

僕たちの同じ制服のオレンジ髪の青年（太陽）が笑顔でこちらにやつてきた

誰かの知り合いかな? つてみんなを見るが頭を左右に振り知らな
いと一体誰? と思つてたら

「なあなあバスケやるんだろ? 僕も混ぜてくれ!!?」
「え? いやごめん。。」

「そんな。。お願ひします!!? このとおり」

オレンジ髪の青年に僕は一度断つたが泣きそうな顔して土下座ま

でお願いされたのでどうしようか悩んで他の3人も見るにしようがないから入れてやれと言われ、僕は

「じゃあ僕のチームに入つてください」

「おおーありがと!」

僕の手をブンブンさせ、めっちゃ笑顔になりまるで子供みたいだなつと思つた。僕もさすが1人じや無理だつたためデカい青年が入つてきてありがたいと思つた。

それで3対2でやると教えたところオレンジの髪の青年が

「3対3じゃないの?」

「いやいや、5人しかいないよ?」

「いるじゃん!ここに!」

オレンジ髪の青年が綾を引っ張つてきた

「え? 私? ムリムリ私バスケしたことないし」

「そうだよ!!? 綾は女子だし初心者だ「バスケに女子だから初心者だからとか上手い下手だとか関係ないよ?」

「「「「？」」「」」

とここにいた5人はオレンジ髪の青年にの謎の威圧に圧倒された
僕達は確かにと思い、綾を入れ3対3をやる事になつた。

僕はオレンジ髪の青年はこの中では1番大きく、センターかと尋ねたが

「うーーん」と悩んでおり、この人は初心者なのかなと思つていたが
「とりあえずバスもらえればいいよ」と言つた

僕たちが先攻で5本決めた方が勝ちで、リバンド有りとなつた

僕が最初にトップに立ち僕にマークを付くのが金子でオレンジの青年は山崎、綾には将が付いたが将はどんなプレーをするかわからな
い青年に寄つていた

僕はトップからドリブルを付き、自分が得意な45度のスリーポイントまで来た、シユートしようかバスしようか迷つてたところ、青年が誰もが予測しないトップでバスを呼んだ

「へい!バスー」

オレンジの青年はインサイドに来ると誰もが思つていたがまさか

のインサイドは逆のトップでバスを呼んだので誰もが驚き仲間の僕
までも驚いたが今はその隙付き青年にバスをした

青年はさつきの笑顔から急に雰囲気が変わった、マークについていた山崎は本能的に警戒したが青年はバスをもらつた瞬間ドリブルをつきレツグスールで警戒していた山崎を一瞬で横を抜き切つた。たが将は元々青年を警戒していたため、ヘルプに間に合い青年は急に止まつたがバックパスで綾にバスをした

「「「なつ」」」

「ええっわ、私？」

「力抜いて！ノーマークだから自分のリズムでシュートだ」

「う、うん！」

逆サイドに居た、綾は最初は青年のプレーに圧倒されていたがバスをもらい慌てていたが青年に言われノーマークの綾は落ち着いてシュートを決めた

「やつた!!?」

「ナイスシュートだよ!!?」

僕は青年に圧倒されたが、なんだか今の1プレイ見ると心の中からワクワクが湧き出てニヤニヤが止まらない

戦っていた3人はと、いうと

「おいおい、あいつ何者だよ」

「全国では見たことない」

「・・・・」コクコク

「しかも俺、今のプレー見てキセキの世代の【青峰 大輝】を思い出した。」

「確かにそうだな。」

「・・・・」コクコク

「はあ。あいつもかよ。」

「・・・・違う」フルフル

「何が違うだよ！山崎」

「・・・あの人は綾に取りやすいようにバスをした」

「!?」

太陽はバツクバスをわざとフワツとあげ、初心者の綾に取りやすいバスを渡し、結果綾はシユートが決まったのだつた

抜かれた後ろにいた山崎はそれに気付き2人に説明した

それを山崎説明したら3人の心の中は

「「（キセキの世代とは何かが違う）」」

「やるじやねえかアイツ!!? 燃えてきたぜ」

「ああ」

「・・・」コクコク

3人も太陽の1プレーを見て自然と笑っていたのだつた

それを見ていた俊は心中で喜び綾は涙目になつた

結果は5ー2で太陽達の勝ちだつたがみんな笑顔になり賭けの事なんかすっかり忘れており太陽が「もう一回やろうぜ、次はチームを変えちゃうぜ!!?」と結局太陽以外がヘトヘトになるまでやり休憩していると

夕方には太陽の祖父が車で迎えに来ており、荷物を持って帰つた

「あーーーー！」

「ん? どうしたの俊?」

「名前聞くの忘れた」

「「「「あつ」」」